

現代日本文学における食と孤独に関する一考察

ソフィア大学「聖クリメント・オフリドスキー」

日本学専攻

コレヴァ・エレオノーラ

1、取り上げるテーマ

本稿は、現代人の生活に支配的な役割を持っている孤独を 1990 年代以降の現代日本文学における食文化とのかかわりで考察していこうとする著者の博士研究の一部です。

食や文学は文化と密接に関連していて、人の世界観や社会の変化や問題などを敏感に反映しています。孤独は人間にとって避けられない運命ともいえます。孤独にはさまざまなタイプがありますが、世界が作られて以来、どのような形であれ人間の生涯に大きな影響を与えています。一方、食料の必要性、安全と愛を求めることは、人間の基本的ニーズであり、お互いに欠かせないものです。一つについて取り上げれば、必ず他の二つも出てきます。テーマは、非常に広範ですが、この報告書の目的は、小説に現れる人間の生き方と食物に人間の孤独がどう反映されているかを示すことです。吉本バナナの『キッチン』（1988）と桐野夏生の『だから荒野』（2013）を例に、人間とその食生活の中で孤独がどういう風に描写されているか、を分析しています。

2、孤独と食について——文学における孤独と食

2-1 孤独について

「孤独感」というものを描写する言葉を、日本語、英語、ブルガリア語で調べてみますと、次のようなものがあげられます。

日本語では、孤独、寂しさ。英語では、*solitude*, *loneliness*, *isolation* など。ブルガリア語では *самота*, *самотност* などです。全体としては孤独感という気持ちを表していますが、語彙によってあらかず意味に微妙な差があります。

Robert Ferguson (2013)によると、孤独には次の三つの側面があります：*solitude*, *vulnerability*, *loneliness*——これを日本語に訳すと、孤独、脆弱性、寂しさとなり、これが広義の孤独の実体と定義されます。続いて、失敗、裏切り、変更、敗北、内訳、恐怖、違い、年齢、損失、悲しみ、疎外感という感情や経験のミックスが付け加えられます。これらは彼によると、定義そのものではないが、その結果あるいは原因ともなれるものです。Ferguson は、それがまた、崩壊家庭とも関係があると述べます。Ferguson のこの指摘は、以下の現代小説を分析する際の鍵となるといえます。

ところで、日本語の国語辞典では、孤独の意味を「仲間や身寄りがなく、ひとりぼっちであること。思うことを語ったり、心を通い合わせたりする人が一人もなく寂しいこと。また、そのさま」と記述しています。¹

このことを、いくつかの論文で検証してみましょう。

Sayre (1978) の書は、広義の孤独に関する権威のある研究とされていますが、Sayre はこの中で、西洋の歴史の中で孤独をテーマとするオリジナルな方法論を提供しています。先ず第一部で古代から現代にかけて孤独の描写を提示し、第二部に孤独をテーマにしている代表的な 20 世紀フランスの小説家に集中して取り組むことで、歴史や環境を異にするさまざまな国にも適用することが可能な分析を提供しています。Sayre は、「孤独」についてのほとんどの研究は、高齢者、障害者、犯罪者などの社会的孤立を孤独とされる心理的要因として、疎外に焦点を当てていると述べます。逆に、実存主義哲学者はこれらの物質的条件を考慮せずに、人間の運命の条件として疎外に焦点を当てているとします。

Sayre は先ず、古代における孤独のオリジナルなコンセプトを確立することから説きます。その最古の意味では、孤独は位置によるとします。すなわち、男性社会の境界を超えた領域、森林、荒野、無人島、外洋といったものが孤独の場所です。ギリシャ文学の *eremia* は危険と絶望的を意味しています。

次いで中世では、彼が「快適な荒野、楽しい孤独」 (*Agreeable Wilderness, Pleasant Solitude*) と呼ぶものについて語ります。しかし、それはほとんどの場合、知識人や芸術家のドメインといえるものでした。

一方、現代における孤独には違うニュアンスがあります。孤独は、*urban modernity* (都市化) と切り離せない存在として出現しています。

Søren Kierkegaard によると、彼はある日、デンマークの王からこう尋ねられました。「書くとき孤独は必要ですか？」 彼の日記に彼が肯定的に応答したことが記されています。「国の最も遠い部分を求めるのですか」と続いて尋ねられたとき、キルケゴールは答えました。「いいえ、そういうところよりベルリン市に行きます。あそこは本当に一人ぼっちで、孤独感が感じられるからです」 (Kierkegaard, 1968)。王の驚きを見て、彼はさらに、「小さな村だと、どんなに旨く隠れてもベルリンのように 40 万もの隠れ家を見つけることはできないでしょう」と続けたそうです。(Larsen 2013, p.25)

逆説的ですが、現代の都市生活は、このように必然的に、混沌とした砂漠のように孤独を生成します。

Larsen (2013) は、都市は、必然的に砂漠のように孤独を生成するといつてよい場所であるから、場所というよりも体験すべき社会的なパラドックスを有する存在である、と考えました。その考察から孤独を「分離」と「孤独」という二つの用語を取り上げ、この二

¹ <http://dic.search.yahoo.co.jp/search?p=%E5%AD%A4%E7%8B%AC&stype=full&aq=-1&oq=&ei=UTF-8>, accessed 27.08.2015

つの間には明確な区別があるとしました。この「分離」(アイソレーション)という言葉が「孤独」を理解する鍵となりました。

John Donne にこのような有名な言葉があります。“No man is an island, entirely of itself; every man is a piece of the continent, a part of the main” (Donne, 1998) (Larsen 2013, p.26)。「孤立(分離)した人間は、まだ人類に属している。孤独は異なる、孤独者も異なる」。「分離」という言葉は、空間的な距離に基づいています。それはたとえば、荒野、砂漠を意味します。広い意味の孤独はあるものから切り離された状態を示しており、分離の対象は、スペースや、意味、価値、アイデンティティなどからと特定または指定できませんが、すべてのものから分離されているわけではありません。

今日孤独は、都市化(Urban modernity)に避けられない、仲間と共有する価値とアイデンティティの欠如があります。さらに、インターネットのvirtual reality、ゲームやソーシャルメディアは、孤独の境界の新たな形を作ります。2015年の8月24日にFacebookというソーシャルメディアには史上最多の人数10億人が訪れたといます。しかし、現実の世界ではなく、ネットの世界の上のことですから、それこそ都市的孤独・現代的孤独と言えるでしょう。

ほとんどの哲学者、思想家や作家は、孤独をスペース、精神のありようstate of mind、経験、運命の状態として、人間の永遠の闘争として捉え、人間存在というものを考え、自分自身を見つけるための手段として扱っています。孤独は、人間自身の内の世界への旅、そして相手への旅です。孤独は二元的な性質を持っていて、人間の価値と美德の追及、痛みと喜び、成功と敗北の両方を体験できるものです。この意味で文学のテーマとしてよく用いられているといえます。

地球の反対側の島国である日本では、その地理的な特性から独特な文化と感性を育んできました。日本の文化では、孤独は、さらに深い意味をもっています。平安時代の貴族、禅仏教の僧侶、武士階級それぞれの孤独観があり、開国以降、明治以降の知識人の孤独のモチーフは、西洋の思想の流れと共通点がないとは言えませんが、たとえば、「侘び・寂び」という特別な美学には日本独自の孤独の味があります。

こういう歴史的背景がある一方、現代日本社会にも都市化に伴う独特な孤独があります。「引き籠もり」といわれる日本の孤独な若者の姿がそれです。長期間にわたり自宅や自室にこもり、社会的な活動に参加しない状態が続きます。厚生労働省は、「さまざまな要因によって社会的な参加の場面がせばまり、就労や就学などの自宅以外での生活の場が長期にわたって失われている状態」と定義しますが、周囲との摩擦によるストレスや精神疾患が原因で引きこもる場合、原因を特定できないまま引きこもる場合などがあります²。30代あたりまでの若者が部屋に籠り、学校などを辞め、ウェブサーフィン、ゲーム、テレビ、

² <http://dic.search.yahoo.co.jp/search?ei=UTF-8&p=%E5%BC%95%E3%81%8D%E7%AF%AD%E3%82%82%E3%82%8A&stype=full&fr=dic>, accessed 27.08.2015

漫画、アニメなどをやり、部屋からでないで、食事をドアの前でもらうケースがその代表的な例です。

この現象のルーツとしては、日本の神話の「あまてらす神」がある日天の岩戸に隠れ世間から分離したことがいわれますが、現代の引きこもりにはそれとは異なる、教育制度、いじめ問題、バブル経済などさまざまな原因があるといわれています。

このような孤独は社会的に無視できる問題ではないため、現代日本文学の支配的なテーマの一つとなるのは当然といえるでしょう。Ferguson (2013) の言葉を借りれば、孤独は崩壊家庭(disrupted domesticity)と密接な関係があります。孤独は、一人一人の孤独に由来する行為ではありますが、それが家庭という社会の中で最も重要な細胞に影響を与えるようになると社会的にも影響が増幅し、大きな社会問題となります。

2-2 食について

食は簡単なことではありません。食は食だけの問題にすることはできません。食は赤ちゃんでさえ本能的に求める、呼吸の次に重要な基礎的なニーズ basic needs です。母乳の最初の一滴は、物理的に生きるため、つまり胃のための食であるだけでなく、同時に思考のため、つまりハートのための食物とも言えます。それは母の愛を感じながら、口で世界を知り、アイデンティティを作り始める大事な一滴です。聖書でも、アダムとイブ以降、食は知識とされています。食は人間関係であり、素材を収穫し調理する (the raw and the cooked) という過程を通して自然と文化との関係であり、目に見える世界と精神的な世界の間をつなぐものでもあります。私たちの基本的なニーズは、愛と安全性に関係があります。食は団結をもたらし、また疎外をもたらします。心理学者、哲学者、研究者、作家の多くは、食の欠如、食欲不振や摂食障害といったものは、何か他のものの欠如に起因することを主張している。こういった食と孤独の密接な関係は、本稿にとりあげた文学作品によく描写されています。

Susanne M. Scubal (2002) は「食べることの二元的な性質—個人/共同軸」で食のそういった側面を述べています (Scubal 2002, p.3)。

この書はこういう書き出しで始まります。“Eating is personal, whatever else it is. What we will and won't eat, when, where, how, how much and why is our own business.” (Scubal 2002, p.1)「食べることは個人的な行為である。何を食べるか食べないか、いつ、どこで、どういうふう、どのくらいということは、個人が決めることだ。この明らかに個人的な食の性質は、味は一人一人に固有のものであるという事実によっても実証される。しかし、本来食べることは、少なくとも二人のものが必要とされる共同な行為である。ほとんどの文化で、食の共通点は、グループ識別の基礎となるものだ」(Scubal 2002: pp. 2-3)。そして、「人間の進化は、食べることがその駆動力であったとも言える。歴史上の社会的集団は食料供給やその準備に力を結集してきた」とします。

精神分析医カール・アブラハムは「誰かを愛することは、ちょうど良いものを食べると同じだ」(Scubal 2002, p.4) といっています。逆もまた真です。「何かが美味しいものを食べることは、誰かを愛することと一緒だ。自分自身の体を愛するの意味でもある」。そして、「食欲を持っていることは、生活のための食欲を持っていることだ」ということになります。(Scubal, ibid.)

2-3 文学・日本現代文学における食

食はそれ自体一つの宇宙であり、それが文学作品にテキスト化された食となるとさらに深い意味合いを与えられてきます。食は日本文学にあふれています。食であふれていることは、日本文学のひとつの際立った特徴の一つであると言えます。食についての会話は、日本では好まれる話題であり、英国人が天気を議論するのと同じような感覚で受け止められています。テレビのバラエティ番組や雑誌など、日本では食べ物はどこにでも登場します。マンガ、アニメなどと同じく、日本の食は日本から世界へ輸出する softpower であり、日本のポジションを強化するための政府の戦略ともなっています。

日本食は、それ自体文化であり、日本独特の美学を深く反映しています。この文化や美学が、日本人の食に対する態度を形成し、従って日本の読者は無意識のうちに小説に食を求めているといえます。一方、何世紀にもわたって食は、些細な女性の仕事、あるいは汚れや未開に近い職人の仕事とみなされたため、学術的研究の対象として無視されてきました。「日本文学における食」に関する研究はまだ十分に進められているとは言えません。僅かに Tomoko Aoyama “Reading food in modern Japanese literature “ (Aoyama 2008) があり、日本文学における食の隠された意味を取り上げ、20 世紀の著書における食の意味を追及しています。

2-4 孤独と食の側面からみた『キッチン』と『だから荒野』

本稿では吉本ばなの『キッチン』と桐野夏生の『だから荒野』という 2 つの小説を例として、孤独と食の密接な関係を取り上げます。言うまでもないことですが、現実の社会で現代人の孤独はますます強く、それは同時に、生きることの基本ともいえる食と切っても切れない関係です。文学は社会を映す鏡となりますから、現代の人たちの悩みと食が結び付けられています。吉本ばなの『キッチン』と桐野夏生の『だから荒野』はとりあげる主題が異なり、特に関係があるわけではありません。本稿の著者の研究のターゲットは 1990 年代以降の多種多様なジャンルの小説です。ただ、グルメ小説、日記などのリアリティックなジャンルは避けられています。社会のさまざまな実態を映すフィクションの中から特に際立って現代生活の中での食が描かれているものを対象としました。

吉本バナナの『キッチン』（1988）を選んだ理由は、題名からわかるように食を司る場である台所を舞台とした、いわば挑発的なテーマの小説であり、またさまざまな言語に訳されていて、世界的にも影響力の大きい小説と考えられるからです。食品としてだけでなく孤独を同様に扱っており、またジェンダー問題にもかかわっていて、研究の過程で無視することはできません。

二つ目の桐野夏生の『だから荒野』（2013）は、現代日本文学の代表的な著者の最近刊小説です。桐野には有名な著作として『Out』、『グロテスク』などがあります。これらほとんどの作品に、現代日本の社会問題、女性の孤独な闘い、日本の家族の崩壊などがテーマとして取り上げられています。食もこの中で、「武器」としての食、アイデンティティとしての食、孤独と食、食と病気といった切り口で重要な役割りを果たしています。

両書ともそのタイトルが、食が孤独と郷愁につながるという意味合いを持っています。

吉本バナナの『キッチン』（1988）のタイトル「キッチン」は家の中で最も神聖な場所を指します。愛を意味し、家族の世話のため食品が用意されます。過去にはこの役割は火、囲炉裏によって演じられました。キッチンの主人公みかげは、祖母の死後、一人ぼっちになりましたが、孤独を埋める力、暖かさをキッチンからもらいます。

私がこの世で一番好きな場所は台所だと思う。

どこのでも、どんなのでも、それが台所であれば食事を作る場所であれば私はつらくない。できれば機能的でよく使い込んであるといいと思う。

…

私と台所が残る。自分しかいないと思っているよりは、ほんの少しましな思想だと思う。
(吉本 2010、p.9)

…

家族という、確かにあったものが年月の中でひとりひとり減っていて、自分が一人ここにいるのだと、ふと思い出すと目の前にあるものがすべて、うそに見えてくる。生まれ育った部屋で、こんなにちゃんと時間が過ぎて、私だけがいるなんて、驚きた。まるでSFだ。宇宙の闇だ。

冷蔵庫のぶーンという音が、私を孤独な思考から守った。(ibid. p.10)

……家の中でも見えて。案内しようか？どこで判断するタイプ？…… 台所。(ibid. p.16)

……

みかげは食事を作るのが大好きです。孤独感を感じないため食事を作る。雄一と彼の“性転換母”のえり子という代理の家族のために食べ物を作るのです。

食は性との深いつながりを持っており、これは、本稿でとりあげた2つの作品でも見られます。みかげは一人住まいであるため、母親からでなく、見よう見まねで自分でやってみたり、あるいは料理学校の先生によって調理することを学びます。主人公は二人とも孤独で、すべて一人でとり残されています。えり子という雄一の Transvestite mother（上野千鶴子の言葉による）の死後、みかげと雄一は一人ぼっちになりました。しかし、これは崩壊家族のためでなく、ただ運命によってのことです。孤独は二人の結びつきを固くします。

食と愛が密接な関係を持つ様子が、『キッチン』の中で、次のように描写されていきます。

ある夜二人ともおなかがすいていて、イコール両方とも孤独感を持っていたといえます。みかげは、一人でカツ丼を食べるのがフェアじゃないと思って、タクシーに乗って雄一にカツ丼を持って行きました。カツ丼は日本食文化では、勝つとの意味のつながりを持っています。「勝つ」、愛が孤独に勝ちます。

「どうして君とものを食うと、こんなにおいしいのかな。」

私は笑って、

「食欲と性欲が同時に満たされるからじゃない？」

と言った

「違う、違う、違う。」

大笑いしながら雄一が言った。

「きっと家族だからだよ。」

えり子さんがいなくても、二人の間にはあの明るいムードが戻ってきた。雄一はカツ丼を食べ、私はお茶を飲み、闇はもう死を含んでいない。それで、もうよかった。

……

「こんなカツ丼は生涯はもう食うことはないだろう。大変、おいしかった。」

「うん。」私は笑った。（吉本、2010、pp.135-136）

どうして私はこんなにも台所関係を愛しているのだろう、不思議だ。魂の記憶に刻まれた遠いあこがれのように愛しい。（ibid.p.79）

一方、桐野夏生の『だから荒野』（2013）は違う感じですか。タイトルも違う印象です。『キッチン』には願望が感じられますが、こちらは「荒野」、絶望です。『だから荒野』の孤独は家族崩壊です。

朋美は普通の専業主婦です。彼女の46歳の誕生日は誰にも気にされていません。外食を予約しましたが、みんなが文句を言っています。夕食の間中、彼女の料理や、弁当のことや『森村の弁当』ってギャグになってさ。(p.30)、外見に文句をいいます。2人の息子の内1人はひきこもりです。朋美は、たまらなくなって家族用の車で逃げます。自分への旅に出る、孤独を択ぶのです。それは『キッチン』と違う孤独です。朋美は家族がいながらも、孤独感を激しく感じます。朋美の旅は荒野の中の旅です。家族は一緒に食事をしない、引き籠もりの息子はファストフードばかり食べている、そういう荒野でした。

食事のことを言われると、返す言葉がない。朋美がとっくに諦めたことのひとつだった。子供の方も、母親の弱点を知っていて、わざと立っている気がする。

朋美は料理があまり得意ではない。浩光が家で食事をするときは必死で作ったが、子供たちと自分だけの時は、あまり手をかけないようになった。

というのも、子供たちの好き嫌いが激しくて、懸命に作っても、ほとんど捨てる羽目になるからだった。どんなに怒鳴っても、息子二人はテレビの前から離れず、野菜料理には手を付けない。(桐野 2013、p.10)

それに対し、朋美の旅は自分への旅となりました。

逃げ回れば、どこまでも荒野が続く。そろそろ戻って、荒野を沃野に変えるを努力をしなければならない。(桐野 2013、p.413)

……

「はい、あなたの使命はあなたが探すしかない。誰もが自分で探すのです。私はこの荒野にいることを選んだのですから、それで終わればいいのですよ。荒野を選ぶと言うのは、そういうことなんだと思います。……」(ibid.,p. 415)

作品の終わりには、家族のメンバーが自分の間違いをわかり、朋美は東京に戻り、荒野を沃野にしてみようと決意します。また最初から始まるます。また外食で。

「今日は焼肉に行くことにしたけど、あなたも行く」

「誘われたの初めてだな」と、不機嫌そうな声。

「ウソばかり。あたしの誕生日に誘ったじゃないの。」

……

コレが沃野？ いいえ、まだ違う。(ibid. p.417)

3、結論

歴史的に、古代には孤独は位置と関係があり、中世には知識人独自の経験として現われ、現代には現代人の運命となりました。孤独感、寂しさは毎日、家族がいてもいなくても、仕事があってもなくても、友達などと関係なく、大都会の中にあっても孤独感いっぱい。情報にあふれている社会でも、社会的なメディアに10億人が入っても、一人ぼっちです。一人ぼっちの戦いともいえません、ただ一人ぼっちです。家族崩壊、人間関係崩壊。これらは食生活、アイデンティティにも強い影響を及ぼします。

家族はもう台所で一緒に食事しません。拒食症、過食症などの摂食障害が常にあります。重要な社会問題ですから、敏感に現代日本文学によくテーマとして取り上げられています。本稿では代表的な吉本バナナの『キッチン』と桐野夏生の『だから荒野』を例に、孤独と食の密接な関係を考察しました。

参考文献

Aoyama, Tomoko. 2008. *Reading Food in Modern Japanese Literature*, University of Hawaii Press

Ferguson, Robert A. 2013. *Alone in America: The Stories that Matter* 2013, Harvard University Press

Larsen, Svend Erik. 2013. *Into the Desert: Solitude in Culture and Literature*. In: *Advances in Literary Study*, vol.1, No.3, 25-30, accessed at www.scirp.org/journal/PaperDownload.aspx?paperID=34130,

on 27 Aug 2015

Sayre, Robert. 1978. *Solitude in Society: A Sociological Study in French Literature*, Cambridge, Mass. and London: Harvard University Press

Skubal, Susanne M.. 2002. *Word of Mouth: Food and Fiction After Freud*, Routledge

桐野夏生 『だから荒野』 毎日新聞社 2013

吉本ばなな 『キッチン』 新潮文庫 1988

<http://dic.search.yahoo.co.jp/search?ei=UTF-8&p=%E5%AD%A4aqz3%E7%8B%AC&stype=full&fr=dic> - 孤独 accessed 27 Aug 2015

<http://dic.search.yahoo.co.jp/search?ei=UTF-8&p=%E5%BC%95%E3%81%8D%E7%AF%AD%E3%82%82%E3%82%8A&stype=full&fr=dic> - 引き篋もり、accessed 27 Aug 2015